

決定的瞬間

岩川
隆

定的瞬間

岩川隆

中央公論社

定價一三〇〇円

決定的瞬間

昭和五十九年三月二十日印刷
昭和五十九年三月三十日発行

著者 岩川 隆

発行者 嶋中 鵬二

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七

振替東京二一三四

検印廃止

〇一九八四

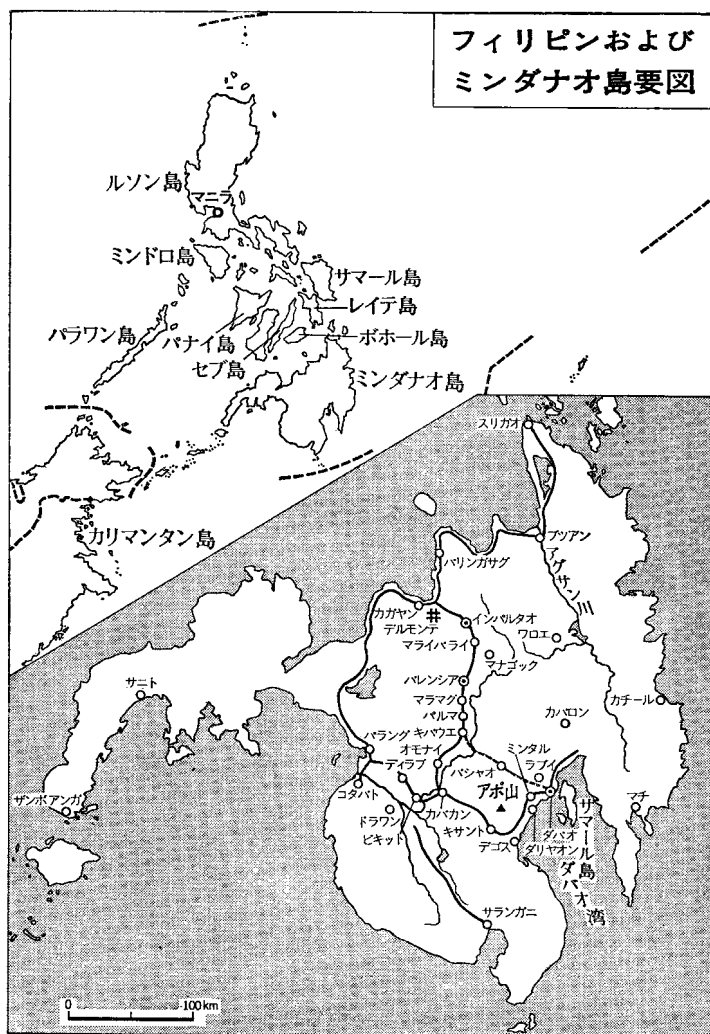
ISBN4-12-001277-8

目次

定 着	乱 反 射	潜 像	ノ ー マ ッ ド
305	187	86	5

決定的瞬間

フィリピンおよび ミンダナオ島要図



ノーマッド

八月中旬の夏のある日、たまたま私は友人から一冊の写真集を借りた。それは、報道写真家として著名なアメリカ人のD・D・ダンカンが、長いあいだ戦場を撮りつづけたなかで、かれ自身忘れ得ぬという作品を選んで編集したもので、総タイトルを“Yankee Nomad”として出版された限定版の本であった。そこには、日本兵の屍を越えて進む米兵のにがい顔があった。炸裂する砲煙の上空に、ぼっかり浮ぶ白い雲もある。無心な山を背景に急降下するあざやかな機影もある。私はしばらく、戦争のなかの日常といったようなことを考え、その瞬間瞬間をシャッターで記録したカメラマンの活動と眼の鋭さにおどろきをおぼえ、幾度か頁をめくった。

“Nomad”とは本来、遊牧民とか放浪者の意だが、ここには「狂人に非ず」「狂ってはいない」という呻きがこめられているのではないか。そんなことを思いながら見てゆくうち、私の指は一カ所とまった。

おかしい写真であった。戦闘帽をかぶった日本人が米軍の爆撃機の機内に坐り、送信マイクを片手にして、窓の外に見える編隊を誘導しているように思われる。前の頁を見なおすと、同じ日

本人が米兵につき添われて投降しているときの写真、米軍の本部らしき部屋で地図をさし示している写真があり、つぎの頁をめくると送信を終って窓の外を見やる姿、爆弾を投下している米軍爆撃機、そして最後に、機内に沈鬱な顔でうずくまっている姿が鮮明に写されていた。

これはいったい、どういうことなのか。私は、そこにダンカンが付した文章を読んだ。

『なんという一週間だったろう!! 一九四五年、八月十四日、グアム』
という日付で、かれは、

『降伏したらしいという噂がラジオで流れたのは、私がフィリピンの南部ザンボアंगाにいたときだった。たぶん、家族たちもわれわれと同じようにそれを聞いたであらう』と始めていた。

日本側からいえば、それは終戦の日の前日にあたる。ダンカンはつづけていた。

『ミンダナオから帰って私は、もしもこれがもう少し以前に撮られていたら全世界にショックを与えたであらうと思われるほど、信じがたいある種の写真を発表した。すなわち、私は明白なる不忠、反逆行為の写真を撮ったのである。いま、この写真は司令部に送られているが、これは、ある日本軍士官（彼はミンダナオのアメリカ軍陣地にノコノコと自分でやってきたのである）が、自発的に三十六機編隊のアメリカ海兵隊爆撃機隊を誘導して、あろうことかジャングルの奥深くにある彼自身のかつての司令部や戦友たちを攻撃させているところをうつした一連のシリーズ写真である。われわれは——そして彼も——連続三日間も持てる全力を結集してそこを攻撃した。

通訳を通じて、彼は海兵隊のパイロットに攻撃命令をさえた下した。私のカメラはものをいわなかつたけれど、かの日本軍士官が作戦地図をひろげてわれわれの戦闘機や爆撃機の乗組員たちのために日本軍陣地、砲床や基地の位置をいねいに説明しているときのリーダーホフ大佐の顔に浮

んだ氷のようなさげすみの表情をとらえた。(中略)敵の士官と私は同じ爆撃機のなかに隣り合せて坐っていた。二日目の攻撃が終ったとき、通訳は操縦士の頭掛け受話器を受け取った。海兵隊航空基地の航空管制室が、いま、ニュースをキャッチしたという——ロシアが日本に宣戦布告をしたのだ。私と同じ爆撃機に乗ったあわれな同乗者は、ガイコツのようにやせこけ、栄養失調の腕にはジャングルの傷がまだ生々しかった。彼は、海上救命チョッキや機関銃のベルトあるいは熱帯携帯食のチョコレートなどの散らばっている飛行機の床にしゃがみこんだ。彼はそこに小さくちこまり、ほおづえをつき、ドロ色のペンキのはげかかった爆弾倉の扉を見おろしていた……うつろに』

これを読んだとき、まず私の胸にわいてきたのは、気の毒に、といったような感情であった。この日本兵は、投降してきてすぐ米軍に協力し、数日前までもに戦っていた戦友たちの陣地、隠れ場所をこまかく教え、爆弾を投下させたという。ダンカンが軽蔑するように、まぎれもなく裏切りであり、非道の所業である。だが、私をおののかせたのは、写真というものの持つ、残酷といつていいほどの記録性であった。

その日本兵は、戦後三十五年を経過してなお、素顔を万人の前にさらしていた。黒縁の眼鏡をかけ、栄養失調のせい、頬やくびすじのあたりに湿疹らしきものが見える。眉は濃く、唇は厚い。ぜんたいに貧相な感じを与えるが、中肉中背で、年齢は二十七、八歳から三十前後と思われる。打ち沈んだ顔つきや額のあたりの印象から類推すると、大学卒の学歴を持ったインテリの青年将校といった雰囲気がある。

米軍を誘導して戦友たちを殺したこの男は、いまでも生きているだろうか、日本のどこかで暮し

ているだろうかという思いが私をとらえた。写真集をたしかめると、発行元は日本光学・ニッコールクラブで一九六六年つまり昭和四十一年に日本で発行されている。

もしもかれが生きていれば、すでに、この写真は本人の眼にふれているかもしれない。生き残りの、かれの戦友たちがこの現場写真を発見しているかもしれない。いずれにせよ、かれは、逃れようとして逃れられぬ裏切りの現場を非情なレンズで確保されていた。

写真集を閉じたのちも、私は、その写真の映像とその男のことが脳裡から消えなかった。考えてみると、似たような写真はどこかで見たことがある、と思った。しかし、それはどこで見たかとなると、答えはすぐに出てこない。

これまでに私は戦争や戦争裁判のことを取材した体験があつて、日本人が俘虜になったとき、きわめて素直に米軍側に協力する傾向があつたことを、さまざまな実例で知っていた。戦争裁判に関しても、ドイツと異なる一つの特徴として、日本人のあいだに密告が多かつたということもよく知っていた。いずれについても外国人は奇異に感じるらしく、日本人の愛国心とはどのようなものか、民族の誇りはないのか、と訊かれたときがあつた。

写真を見たとき、私自身のうちにも、よくあることだという許容の感覚があつた。そのような私の鈍感な部分が、戦後三十五年を経て、いま、刺激を受けていた。

私は写真の男に関心を抱いた。

写真集を貸してくれた友人は、ダンカンと顔見知りということであつた。

「この日本人の素姓を知りたいね」

私が頼むと、かれは、ちょうどダンカンが来日して写真展を開いているところだ、訊いてやろ

う、ところよく引き受けてくれた。数日して返答がきた。氏名についてはヤマモト某としか記憶していない、撮影した場所はフィリピンのミンダナオ島ザンボアンガで、日時は広島に原爆が投下された一九四五年八月六日前後、かれが投降してきたところは海兵隊基地であるという。

「日系二世ではないだろうね」

「いや、日本軍の将校らしいよ。下士官かもしれない。日本人にはちがいない」

「米軍側の演出ということは考えられないか」

「ダンカン

は事実だと断言していた。やらせで、こんな文章は書かないだろう」

「はたして生きているかね」

私たちはそんな対話を交した。

ダンカンに直接会ってもっと詳しいことを訊きたいと思っていたが、数日後にかれはパリにのんだと知らされた。なにしろ忙しい人物である。その後、私のほうも仕事に追われて過したが、黒眼鏡の憂鬱な顔、マイクを握りしめた手、投下される爆弾、うずくまった姿は、折にふれて脳裡に浮び上った。

いま、かれはなにを考えているか、都会に住んでいるだろうか、地方で暮しているだろうか。私は某日、ひまを見つけて、フィリピンの地図を拡げてみた。海兵隊が基地を置いたというザンボアンガ市は、ミンダナオ島の南端にあった。厚生省援護局が公表した『終戦時における陸軍主要部隊配置図』を見ると、ザンボアンガには、第十四方面軍のうち第三十五軍に属する独立混成第五十四旅団が在駐していたと記されてある。かれは、この旅団の将兵だったろうか。

私はしだいに深入りしていった。写真を撮られた人物にとつては迷惑なことにちがいないが、かれが歩いた戦後の軌跡を知りたい、ひと目だけでも会ってみたいという素朴な気持があった。夏も終りの頃、私は、四谷三丁目から荒木町のほうへ歩いて梶原譲という男をたずねて行った。梶原はPICと称するフィリピン戦跡訪問団の事務局長をつとめ、生き残りの将兵や遺族の消息についてはすこぶる詳しいと聞いていた。

事務局はビルの二階にあった。部屋は六畳くらいの広さしかない。

「ザンボアンガ……ああ、萩三六一比島会というのがありますよ」

と、梶原は言った。見せてもらったのは第六十二回フィリピン戦跡訪問団として昭和五十年十一月に現地に旅行した集団の名簿であった。生存者と遺族とを含めて六十四名にのぼり、幹事役には岩手県水沢市に住む医師・小見昌夫という人物があたっていた。

「狭い事務所だと思いでしょ」

梶原は精悍な顔をほころばせた。

「最初のうちは、みなさんに私を信用してもらえるかどうか不安でした。ところが御遺族のほう、私を疑うこともなく数十万円の旅行の費用を持ってこられ、黙って置いてゆかれる。こんなみすばらしい事務所を見て心配になりませんか、と訊くと、いいえ、狭いところで頑張っておられることを知って、かえって安心しました。たいへんなお仕事でしょうが、元気にやってください、と逆に励まされております」

私たちはしばらくフィリピンの奥地のことや遺骨のことについて話した。梶原が語る旅行社繁昌の話もおもしろかった。

私は昭和八年にフィリピンで生まれました。父親は現地で為替に関係した仕事をやっていたのですが、これが大当りして、いまの金にすれば八十五億円くらいの資本金で会社の経営を始めていました。その後私自身は昭和十五年に母親と一緒に広島県の福山に帰っています。フィリピンに残っていた父親は戦争が勃発すると同時に現地召集にあり、昭和二十年頃戦死し、終戦とともに財産もすべて没収されました。私はどうも勉強のほうは好きでなかったです。テニスが好きで、福山の商業高校時代には軟式テニスで国体の三位に入ったことがあります。それでも推薦入学で法政大学の経済学部に進み、なんとか卒業しました。その後は旅行代理店に就職しましたが、フィリピンで生まれたという因縁もあるし、将来はなんとかフィリピン専門のツアーを組みたいと思って、昭和四十年頃から戦死者の遺族の住所調べから始めました。思いついたらすぐに行動にうつすのが私の生き方です。私が扱ったツアーがNHKの番組に登場したことをきっかけにして、あちこちから問い合わせがくるようになりました。

それからあと二足のわらじで、勤め先の仕事と戦跡訪問団のツアーと双方を手がけておりましたが、すすめるひともあって、昭和四十九年に独立いたしました。

ひとくちに戦跡訪問といっても、ただフィリピンに行つて、こゝらで亡くなられましたと案内するだけではほんとうの供養にならぬと思ひ、これまでいろいろのことを考えました。石碑も建てました。お寺も建てました。私はその寺の住職ということになりますから、昨年一年間は、頭を剃つて袈裟を着てずっとフィリピンでお経をあげておりました。日本に帰つてくると、遺族の御老人たちが私にむかつて手を合せられる。そのように感謝されていると思うと、お経を読むの

も生き甲斐になるのです。釜石に行ったとき津軽三味線を弾く男に会い、かれをフィリピンに連れて行ったこともあります。

あなた想像できますか。おびただし戦死者が出た山岳地帯に分け入り、山の頂上まで登って津軽三味線を弾いてもらう。三味線の音が山々にこだまして、同行者たちは思わず涙して合掌しましたよ。佐渡おけさを踊ることのできる人たちを、遺族とともに連れて行ったこともあります。今年の十月には、戦艦・武蔵の遺族会の方々をルソン島の沖に連れて行って、水上慰霊祭をやるうと思っております。そうですね、ああ、こういうところで死んで行ったのか……と、そういう遺族の感無量の顔を眼にするたびに、連れて来てよかったなと思いますよ。あなたも一度、勉強のために一緒に行ってみませんか。私は金を貯めることが下手で仕事にばかりつき込み、いまだにアパート暮しです。糖尿病の気があって、酒もやりません。先がどうなるかよくはわからないが、いまの仕事だけを生き甲斐にしています。

「これに似たひとを見かけたことはありませんか」

ある道理がないとも思ったが、私は、ダンカンが撮った写真を梶原に見せた。梶原は、うーむと唸り、こういうやつがいたのだな、と呟いてくびを振った。

「生きていたとしても、世間には出てこられんだろう」

私も相槌を打ったが、心の中ではべつのことを考えていた。それまで戦犯裁判を取材するたび、真実に照らし合せてこいつだけは許せないと思われる人物が、捜したずねてみると大きい邸に住んでいたり、人格者として公職についていたりするのである。日本とはそういう国だ、と私は思

うようになつていた。

「こいつを捜し出すのかね」

梶原の眼が、なぜ、と訊いていた。なぜと問われて、私自身にもうまい回答はできない。なにをいまさら、と梶原は非難しているようにも思われる。

「單純素朴な好奇心ですよ」

と言つて、私は部屋を出た。

大通りに向いながら、私は私自身に幾度かなぜ、と問いかけてみた。興味に駆られて三十余年前の他人の古傷をあばき立てようとしてゐるのではないか。そうかもしれない、そうなのだ、と思うはしから、しかし私の胸に、かならず居場所をつきとめよう、会つて過去の行為を追及するといふのではない、ともかく顔を見たいのだという思いが強くなつていった。

秋が深まるにつれて、手がかりがすこしできてきた。調べてみると、ザンボアンガには陸軍の歩兵旅団のほかに海軍の警備隊もいたらしい。たまたま飛行場に着陸したところ、飛行機を米軍の空爆で破壊され、やむなく現地に居留していた航空隊員たちもいたという。取材先には、ミナオ・フレンドシップ・ソサイエティの会長・榎島庄五郎、独立歩兵第三百六十一大隊の小見昌夫、海軍第三十二警備隊の浅野賢澄といった名が出ていた。榎島庄五郎は豊橋市に住んでいる。浅野はその頃フジテレビKK社長という要職にある人物であつた。思わぬときに思わぬひとの名が出るものだ。と私はおどろいた。浅野に面会を求めようかと迷つたが、結局、私はさしひかえた。写真の男は海軍の将兵とは思えなかつた。

戦闘帽には横線もなく、投降するときの姿を見ると、半袴をはいている。私の周囲にいる年配

者に写真を見せると、たいてい、

「陸軍だな。通信兵かな」

と言った。「海軍ではありませんか」「ぜったい、海軍ではない」「航空兵では」「そうかもしれないが、しかし、ちがうなあ。たぶん、陸軍だね」という応答を幾度か繰り返していた。

十月に入って、私は、戦後厚生省が調べた残務記録の一部を手に入れた。それによるとザンボアंगाにいた陸軍の独立混成第五十四旅団は三個大隊を主体としていた。

部隊	総人員	戦没	生還
旅団司令部	九七〇	七四八	二二二
第三六〇大隊	一、一五七	九七〇	一八七
第三六一大隊	一、一四四	八〇一	三四三
第三六二大隊	一、一一三	八七〇	二四三
旅団砲兵隊	四〇八	三一一	九七
旅団工兵隊	二一七	一七五	四二
旅団通信隊	一八八	一五六	三二
計	五、一九七	四、〇三一	一、一六六

数字は、悲惨な戦いを如実に示していた。五千名を超える将兵のうち四千名あまりが戦没し、生き残って帰国した者は千余名にすぎない。私はその膨大な数に呆然とした。